

教育課程に係る教育時間終了後等に行う 教育活動のあり方に関する一考察 — 『幼児の音楽グループ』の活動を通して—

An Inquiry on Extracurricular Activities for Young Children — Yong Children Music Groups —

宮本慶子^{*1}、吉田若葉^{*2}

(北陸学院大学地域教育開発センター「幼児の音楽グループ」)

要旨

本稿前半では、教育時間終了後の教育活動である『幼児の音楽グループ』の実践過程を辿り、活動の基本姿勢である“子どもの生活と向き合う”“発達に応じた環境の工夫”“内から表れる表現の重視”の3点から、この活動が幼稚園教育の基本を踏まえていることを検証し、活動の内容や意義を明確にしている。後半では、“心身の柔軟性”をテーマとして、子どもの表現を多面的に捉えて展開した事例を考察し、教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動が、子どもの発達や生活の連続性を考慮し、幼稚園教育の基本を踏まえて実施されるよう教師間の連携の重要性を述べている。

キーワード： 幼稚園教育の基本(Curriculum of the Early Childhood Education)／
心身の柔軟性(Flexibility of Mind and Body)／
幼稚園との連携(Cooperation with the Kindergarten)

I はじめに (吉田)

「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」¹⁾ これは、現行の「幼稚園教育要領」第1章総則第1 幼稚園教育の基本の冒頭の文言である。学校教育法第22条²⁾には、幼稚園は、教育の基礎を培うものとして保育することと、適当な環境を与えて心身の発達を助長することを目的とすることが示されている。

筆者らは、〇幼稚園保育終了後の課外活動である『幼児の音楽グループ』(以降「音楽グループ」

と記載)を担当している。「音楽グループ」は1970年に北陸学院短期大学附属幼児・児童教育研究所の事業として開設し、2008年より北陸学院大学地域教育開発センター幼児・児童教育支援事業として位置づけられている活動である。参加希望の園児を対象とする週1回の活動ではあるが、担当者は幼稚園教育の一旦を担う者としての使命をもって研究的に活動を続けてきた。

平成20年、現行の幼稚園教育要領の改訂にあたり、中央教育審議会答申では改善の基本方針として、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動について、その活動の内容や意義を明確化し、幼稚園における教育活動として適切な活動となるようにすることを示している³⁾。そして、「幼稚園教育要領」に教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の項目が明記された。「音楽グループ」は時間帯の点で教育時間終了後に行う教育活動であることに鑑み、これまでの「音楽グループ」の業績の過程を辿り、「幼稚園教

^{*1} MIYAMOTO, Keiko

北陸学院大学地域教育開発センター
「幼児の音楽グループ」

^{*2} YOSHIDA, Wakaba

北陸学院大学地域教育開発センター
「幼児の音楽グループ」

育要領」とその改訂の経緯と照合することから、活動の内容や意義を明確化することを本稿の目的とする。また本稿後半では、2014年度の実践を通して活動の意味を検証し、今後の活動の方向を探っていく。

II 『幼児の音楽グループ』活動の意義 (吉田)

教育活動としての「音楽グループ」の活動の意義を明確にするには、人格形成の基礎を培う幼児期の教育における有効性を実証し、教育的価値の有無を明らかにすることであろう。

「音楽グループ」を考案した南信子(北陸学院短期大学保育科長・附属幼稚園主事)は、開設4年目の『音楽グループだより』で「研究所で、なぜ音楽グループの活動をつづけているのか、そこには、深い教育の根本的な問題があることを、今更のように感じさせられています。」⁴⁾と述べており、この“教育の根本的な問題”と向き合うことが、その後の活動の軸となっていった。筆者吉田は開設当初から活動の運営と研究を担ってきた。45年間の活動の過程を振り返り研究内容とその背景を時系列で見直していくと、研究態勢に対応して様々な試みを重ね、内容が改善されてきている。これまでの研究の蓄積によって活動が構築されてきたといえる。

II-1 開設の背景

「音楽グループ」の開設は昭和45年であるが、当時の幼児教育事情については幼稚園教育要領の改訂から知ることができる。幼稚園教育要領は昭和31年に作成され、昭和39年に改訂された。この改訂では教育課程の基準としての性格を明確にして、幼稚園における具体的なねらいが、健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作の6領域で列記され、指導及び指導計画作成上の留意事項が明示された⁵⁾。水原克敏(2014)は当時の状況を、幼稚園教育は小学校教育と性格が異なることが強調されたにもかかわらず、各領域の指導書が出され、あたかも教科のように扱われていた実態もあったとして、各領域で指導する計画のほうが多量の幼稚園にとっては分かりやすかったようだ⁶⁾と指摘している。この幼稚園教育要領は25年にわたって幼稚園教育を導くこととなった。

保育内容6領域の中に音楽が明示された結果、音楽を一つの文化として子どもの時からという考えが盛んになり、保育現場では外国の教育法を安易に取り入れることや、発表の結果を重視する傾向がみられた。子どもの音楽性を日常生活のなかで育てていくような音楽教育の理論や実践が確立していないのが実情であった。そのような状況を踏まえ、“幼児期の音楽教育はいかにあるべきか”を命題として「音楽グループ」は開設された。⁷⁾

II-2 活動の基本姿勢

教育は一人一人の生きる力の育成を目指している。平成20年、国の教育課程の基準全体の見直しが検討され、各学校段階にわたる改善の方向性として、“生きる力”という理念の共有が掲げられた。その他、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上や学習習慣の確立、豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実、などが示された。³⁾

人間形成の基礎を培う幼児教育においては、その後の教育の方向性を考慮しつつ教育の基本を踏まえた指導が求められる。つまり学校教育法が示す、幼稚園は教育の基礎を培うものとして保育することと、適当な環境を与えて心身の発達を助長することを目的とするということである。

「音楽グループ」は“幼児期の音楽教育はいかにあるべきか”を命題として、その時々的情況に応じた研究テーマをもって取り組んできたが、子どもとの活動においては、共に楽しむという姿勢を変えることはなかった。これまでの子どもへの対応は、活動の基本姿勢として3つ挙げることができる。“子どもの生活と向き合う”“発達に応じた環境の工夫”“内から表れる表現の重視”の3点である。本章では、「音楽グループ」の基本姿勢3点から、この活動が幼稚園教育の基本を踏まえて実践されていることを検証していく。

II-2-(1) 子どもの生活と向き合う

マーセルは教育の本質について「・・・一見、魅力があって、大切に思われる科目も、それら自体には全然価値がないのです。それを学ぶ人たちが一老いも若きも一よりよい生き方ができるようになった時、はじめて、それを学んだ価値が

あったといえるのです。(中略)教育は、人間の生活と結びついた時、あらゆる問題を解決する力となるのです。」⁸⁾と述べている。そして、教育の本質は驚くほど単純なものである(単純さの中につかみにくい微妙な点があるが)として、おろかにも私たちは教育の本質とまったく関係のない事柄で、問題をわざと複雑にしている場合があると指摘している。この指摘は現在の教育現場にも見られるように思うが、この問題についての考察は別稿に譲るとして、教育の本質を会得することが、南のいう“教育の根本的な問題”であり、“教育の基本”を踏まえるということではないだろうか。このマーセルの考えは、“生きる力の育成”と通じるところであり、「音楽グループ」開設の背景でもあった、子どもの音楽性を日常生活のなかで育てていくような音楽教育の必要性にも繋がる場所である。

II-2-(1)-① 子どもの今と向き合う

幼児期は、運動機能が急速に発達し活動意欲が高まってくる時期である。興味や関心の広がりとともに子どもの生活の場が広がっていく。家庭から離れて過ごす集団生活の中で、様々な体験を積み重ねて自己を発揮するようになる。また、幼児期は、自我の芽生えや他者の存在を意識すること、自己抑制の気持が生まれる時期でもある。自己抑制には表出と解放が大きく影響するが、「音楽グループ」では様々な機会をとらえて、音楽の働きによる表出や解放的な活動を実践している。

子どもの幼稚園生活が豊かになるように、教師は子どもの今と向き合い子ども理解を深めていかなければならない。生きる力の基礎を育成するには、集団生活の体験と同時に一人一人の子どもに応じた対応も求められる。これは教師の経験年数に関係なく、教育において必須の条件である。「音楽グループ」の新年度開始時には、まず、グループとしての雰囲気や個々の反応をおおまかに掴んでから、その後の活動プランを立てていく。教師は子どもと向き合う過程を繰り返すことで、子どもの実態や子どもの身の回りの様々な事象を総合的に捉えていけるようになる。教師も子どもと共に成長し、子どもへのアプローチの幅が広がってくるのである。

II-2-(1)-② 視点をもって向き合う

「音楽グループ」では、開設2年目から“幼児の音楽に対する実態”をテーマとしている。音楽に対する実態とは、子どもの音楽に対する反応や表現をさす。子どもの言葉や表情、仕草などから、教材の適否や興味関心の有無あるいは環境の影響などを知ることができる。広く子どもの実態を把握するには、様々な角度からのアプローチが必要であり、正確な情報収集のために記録が不可欠となる。記録は書く人の視点により様々な表現で記され、視点が定まっていなると的を射た読み取りの記録にはならない。どのような視点で子どもと向き合うかが、その活動内容と記録を左右する。

「音楽グループ」では、幼児期における音楽教育は人間形成の基礎となるものでなければならないとの観点から、子どもの実態に応じて試行錯誤を重ねる内に、創造的な教育の重要性を確信するに至った。そして1983年、幼児と音楽の関わりの実状を考察して“幼児期における音楽教育は創造的な人間形成の一環として行うべき”との立場で具体的な試みを発表した。⁹⁾この小論が音楽之友社『幼児と音楽』の「誌上保育研究室」に掲載され、その後の実践研究に弾みがついた。

II-2-(2) 発達に応じた環境の工夫

幼稚園教育要領は、幼稚園教育を行う教師は幼児との信頼関係の基、幼児と共によりよい環境を創造するようにと示し、¹⁾ 幼児の発達の実情に即応した創造的な教育の重要性を示している。

マーセルは、私たちがいろいろな能力を身につけるのも物事を成し遂げるのもみな成長の結果であり、この成長の原理は学習のどの分野にも適用されるとして、音楽教育に発達の原理の適用を提唱した。その理念は、きわめて明瞭、単純であり、音楽の活動、経験、試み、学習のいっさいを、音楽的成長の過程のひとつと考へ、計画する、というものである。つまり、歌うこと、ひくことなどを手段として、音楽的反応の発達を促そうとする理念であると述べている。¹⁰⁾ マーセルのこの理念は、幼稚園教育要領がねらいとするところの“生きる力の基礎としての心情、意欲、態度”と合致するところであり、「音楽グループ」

においても基本としていることである。

II-2-(2)-① 発達のとらえ方

発達のとらえ方について、幼稚園教育要領解説では「生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程を発達と考えることができよう。」¹¹⁾と記しており、幼児期の発達の特性で特に留意すべき主なこととして、¹²⁾・幼児期は、身体が著しく発育し運動機能が急速に発達する時期であり、他の心身の諸側面の発達も促す。・安心感を基盤として、自立へ向かう時期である。・自分なりのイメージを形成していく。・周囲の対象の言動や態度を模倣する時期であり、人格的な発達や、生活習慣や態度の形成に重要である。・環境とのかかわりを通して、物事への対処や人との交渉などの基本的な概念を形成する。・様々な葛藤やつまずきの体験を通して自己抑制ができるようになる、の6点を挙げている。この点については「音楽グループ」でも留意していることであり、子どもたちがリラックスした雰囲気のもとで、自分らしさを表現できるよう多様性を受け入れて柔軟に対応することを重視している。

II-2-(2)-② 教材研究と展開の工夫

活動が充実した展開となるには、どのような教材を選択して用いるかが重要なポイントとなる。教材の適否には、興味・関心の実態、空間の構成、その活動の狙いに応じたアプローチの仕方や場の雰囲気など様々な要素が絡んでくる。用意した活動も場面により修正や変更など臨機応変な対応が必要となるので、教師には日頃から様々な場面を想定した教材研究が求められる。特に合奏の活動は、個々の音を揃えて表現するという課題が生じるので教材研究が大きく影響する活動である。

1982年～2006年の間、幼稚園の行事で発表する楽器指導に係る機会が多くなり、筆者の実践の幅が広がってきた。幼児期は音に敏感な時期である。したがって係わった現場では、表現の可能性が広がるよう楽器の充実を図り、子どもが自然体で演奏できる打楽器を中心に様々な音色の楽器を揃えていった。楽器指導は、まず演奏する子どもの興味や関心を把握した上で、曲や楽器の選択、

奏法や配置を工夫していく。特に個の表現と集団の表現のバランスに配慮して進めていく。

実践の成果は、研究として発表することで検証してきた。①幼児による創造的な音楽活動の発展を12事例で紹介(1983)⁹⁾ ②楽器を用いた創造的な活動事例：演奏以前の経験・楽器と遊ぶ・アンサンブル・大人数の合奏(1988)¹³⁾ ③子どもの音楽表現にみられる解放と共感の6事例と考察(1998)¹⁴⁾ ④キリスト教保育120周年記念クリスマスでの賛美歌と合奏の指導経過：子どもの主体的な活動展開を7エピソードで報告(2007)¹⁵⁾ 以上4点が主な実践報告である。

当時の活動について「・・・音楽を子どもの自己表現として捉えていく。特に子どもの主体的な表現と子どものイメージを大切に考え、聴くこと、そして感じたことをできるだけ自然体で表現することを重視し一人一人のペースを尊重している。幼児期には楽しんでいられるばかりの活動だけでなく、音楽的な感性を養うためにも、揃って演奏するという課題に挑戦することも大切な経験であり、その機会がクリスマス会である。結果から特訓の成果と見る人も多いが、実際は、子どもたちそれぞれの自由な表現からスタートして創りあげた音楽であり、その過程で生まれた共感によって生み出された響きである。教師の役割は、子どもたちが積極的に表現するような場を設定することである。」¹⁶⁾と記している。活動は、子どもの主体的な意欲によって展開していくような様々な予想を立てる。導入では視聴覚教材の視聴や製作活動、読み聞かせや話し合い等、多様な体験を用意し総合的な活動として展開していく。また、発表した曲は合奏の楽譜として作成しているが、再演奏の場合は構成メンバーの人数や特性によって、その都度アレンジをする。環境の工夫も含む創造的なアプローチと総合的な視点が要となる活動である。“創造的なアプローチ”とは、子どもが自分らしく表現できるように、励ます・協力する・刺激を与える・観察する・興味を呼び起こす等その場に応じて試みる働きかけのことである。木村信之(1980)は創造的な行為にはいろいろな動機があるとして、創造性に働く諸要因として・自発性・努力・興味・過去経験・感情のはたらき・個人と集団の6点を挙げている。¹⁷⁾創造性に働く諸

要因はすべて子どもの発達過程に応じて押さえておく必要がある。

Ⅱ-2-(3) 内から表れる表現の重視

平成元年（1989年）、25年ぶりに幼稚園教育要領が改訂された。6領域の保育内容が5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）となり、音楽リズムと絵画製作の領域が「表現」として示された。5領域は保育内容を幼児の発達の側面から編成したもので、総合的な指導を行うために教師がもつ視点であることを明示している。この改訂は、音楽活動を子どもの表現として総合的に捉えていた当時の「音楽グループ」の考え方と一致するものであった。

平成10年（1998年）、幼稚園教育要領3度目の改訂が行われた。生きる力を育むという観点から、教師の基本的な役割が明確になり、教育時間終了後の教育活動や小学校との連携など幼児の発達に応じた生活の連続性を重視する文言で今後の方向が示されたが、その背景には6領域時代の保育観から5領域への移行が難しい実情が伺えた。当時、保育学会が特集論文「幼児の音楽表現と保育」のテーマで公募を行った。課題設定の背景について小林美実（1998）¹⁸⁾は、平成元年の幼稚園教育要領改訂で領域「表現」が出現したことで生じた状況を踏まえたタイムリーなテーマであると述べ、公募の趣旨について、幼児の生活（あそび、活動など）全般を視野に入れて、音楽やそのあり方を見直すことの重要性を問う意図で設定したと述べている。公募課題が、筆者の研究課題でもあったので応募したところ採択された¹⁴⁾。内容については「特集論文に共通してみられるのは、子どもの内から表れる表現の重視である。それには心や体の解放と、共に表現しあう者の共感が重要である。吉田は、子どもの音楽表現を感情表現ととらえ、その表現を豊かにする条件として、共感と解放を提唱している。大きいテーマであるが、事例に即しながら立証を試み、理論と実践を結びつけようとしている点を評価したい。」¹⁸⁾との評価を得た。

「音楽グループ」の活動は、主として〈表現〉の領域¹⁹⁾に当たる。表現は、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊か

な感性や表現する力を養い創造性を豊かにする領域である。内容の取扱い事項の文言を挙げてみると、・身近な環境と十分にかかわる・心を動かす出来事に出会う・感動を他の幼児や教師と共有する・表現することを通して豊かな感性が養われる・幼児の素朴な自己表現を受容する・幼児自身の表現しようとする意欲を受け止める・幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにする・生活経験や発達に応じる・自ら様々な表現を楽しむ・表現する意欲を十分に発揮する・他の幼児の表現に触れられるよう配慮する・表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるよう工夫する等である。以上は幼稚園教育の基本を踏まえての文言であり、「音楽グループ」でも留意している事項であるが、実際の子どもたちとの活動では、子どもの実態に応じて具体的な活動のねらいを立てて展開していく。

Ⅱ-3 幼稚園生活の連続性の確保

平成20年、現行の幼稚園教育要領改訂にあたり、中央教育審議会答申が示した改善の基本方針³⁾は、「①幼稚園教育については、近年のこどもたちの育ちの変化や社会の変化に対応し、発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性を確保し、計画的に環境を構成することを通じて、幼児の健やかな成長を促す。②子育て支援と教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動については、その活動の内容や意義を明確化する。また、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動については、幼稚園における教育活動として適切な活動となるようにする。」の2点であり、子どもの心身の発達の連続性の視点から改善の方向性を示している。以前は「音楽グループ」に関して、幼稚園の教育時間とは別の役割として捉え、活動内容の連携をもたず区別するような考え方もあったが、子どもの育ちにとっては、連続性や多様性の視点からも柔軟な対応が有効であると考えられる。

また、幼稚園教育要領第3章第2²⁰⁾では教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項として・教育課程に基づく活動を考慮して、幼稚園の教師と緊密な連携を図ること・幼児の生活を考慮して計画を作成し、多様な体験

ができるようにすること・幼児の生活のリズムを踏まえつつ、弾力的な運用に配慮すること等を示している。

教育時間終了後の教育活動では、子どもの心身の負担にならないように配慮し、子どもの発達や学びの連続性、生活の連続性を考慮して、幼稚園教育の基本を踏まえた指導計画の作成が求められている。本稿Ⅱ-2・Ⅱ-3での考察を踏まえ、今後の『幼児の音楽グループ』の活動の趣旨と内容を下記のように明示する。

《趣旨》

- ①音楽的な活動を中心とした表現の多様性を楽しむ
- ②子ども一人一人のその子らしい表現を育む
- ③幼稚園との連携を図り、音楽を中心とする表現活動に関して研究的な姿勢で実践する

《内容》

音楽活動を中心として、子どもの表現を多面的に捉えて展開していく。具体的には、歌や楽器による表現・身体による表現・絵を描く表現・縄やボールを用いる表現などを関連させながら、幼児期にふさわしい活動として総合的に計画していく。特に子どもの「心身の柔軟性を養う」ことをねらいとし、子どもとの応答関係を最も大切にしていけるので、臨機応変に活動を展開する場合も多い。

具体的な活動については、子どもの実態に応じて実践するが、解放的でリラックスした雰囲気の中で、音楽の楽しさを実感するようなプランを工夫する。一つの活動をゆったりとした流れの中で展開し、集団の集中よりも一人一人の表現のペースを大切にしていける。そのなかで、考えたり、工夫したり、発見して、その子なりのイメージが豊かになるようにアプローチしていく。

なお、今後も継続していく努力目標としては下記の4点が挙げられる。

- ①活動のポイントを押さえたアプローチにより、子どもの心情・意欲・態度を読み取る
- ②自発性が最も発揮される“音楽的な環境での自由あそび”の環境創りを探る
- ③発達の連続性の観点から、幼稚園の行事や保育内容との関連性を考慮する
- ④子どもも教師も双方の自分らしさを大切に

した活動を目指し工夫する

Ⅲ 実践からの考察(宮本)

筆者宮本は幼稚園で15年、小学校で2年の教諭経験がある。「音楽グループ」を担当して2年目であるが、意外にも指導計画の作成や子どもに応じた柔軟な対応に躓いてしまった。幼稚園教諭の経験があったにも関わらず、プランや子どもの対応に戸惑ってしまったのは、教育時間終了後の教育活動だからこそ踏まえるべきポイントがあったように思う。

幼稚園教諭と小学校教諭の時は、毎日の生活の中で子どもを捉え、保護者と連絡し合うことで家庭環境や育ちの背景を理解していた。しかし、「音楽グループ」は週1回1時間半の活動であり、教師が子どもと過ごす生活時間が、教育時間である幼稚園や小学校とは大きく異なっている中で、子どもを把握することになる。

また、教育時間終了後の「音楽グループ」へは、子どもたちが幼稚園の生活から引き続いて参加してくるので、毎回担当教師が予想していた状態であるとは限らない。従って、子どもの今をどう捉えるかによって、その日の活動が方向付けられることになる。「音楽グループ」の教師には、子どもの幼稚園生活や活動の連続性を踏まえて、臨機応変に対応することが求められる。筆者には、連続性の視点が欠けていたように思う。

そこで、「音楽グループ」が限られた時間の活動であることと幼稚園生活として連続した活動であるという点で、幼稚園の教師と情報交換をして子ども理解に努めた。情報交換の時間はあらたまって設定せず、掃除や立ち話などわずかな機会を捉えて行っている。また、筆者にとっては、毎回撮影したビデオ記録を見返すことで、自身の子どもへの対応の様子を見直すことができた。ビデオ記録は幾度となく再検討できるため、現場で見落としていたことに気づき、新たな子どもの一面を発見し、次の活動へのヒントを得ることもできる。本章では、「音楽グループ」の活動が幼稚園教育の基本を踏まえて行っていることを、2014年度のビデオ記録をもとに4、5歳合同の活動から検証していく。活動の事例は【 】に記す。

Ⅲ－１ 心身の柔軟性

「音楽グループ」は希望者が参加する活動である。新年度に参加する子どもの様子を大まかに把握するため、開始日前に幼稚園の保育を参観した結果、子どもに動きを意識させ、実感させることが必要かもしれないとの予想を持って2014年度をスタートした。

第1回目の活動では、下記のような事例が挙げられる。

【初めて出会う子どもたちと名前のやり取りができるように、子どもの名前の頭文字からはじまる絵を描いたペンダントを用いて、名前を当てるゲームのプランを立てた。ところが、絵にも頭文字の音にも子どもからの反応が見られず、教師が絵の説明をしたり子どもの名前を呼んだりすることになってしまった。】ペンダントを用いた名前のやり取りを行った現場では、あまり関心を示していないと思っていたが、ビデオ記録を確認するとペンダントを大切に仕草や表情が見られた。しかし、絵と頭文字については、様々な角度からアプローチしてみたが消極的な表現に留まったので、活動の中で言葉のやりとりを重視していかなければならないと感じた。

【教師と子どもが名前を呼び合う1対1のキャッチボールは、例年恒例となっている活動なので、嬉々とした表情の子どもを予想していた。しかし、うまくボールが受け取れなかったり、投げたボールが届かなかったりと全体的に活気がなく動きが小さく感じられた。隊形を変えて体を動かす活動では、教師からの「ボールになってみよう」に対して、どの子もうずくまって動くことがなかった。子どもにとってボールのイメージは、丸だけだったのかもしれない。】ボールのやり取りがぎこちなく、イメージを持つほどボールと遊んでいないということなのかもしれない。

【緊張と弛緩を体感することをねらいとした「マリオネット」の曲は、マリオネットになった子どもたちが糸で操られているように手首・肘・肩・腰の順に力を抜いていくことを楽しむのだが、全身に力が入ったまま体の硬い子が多く、教師が子どもの手や肩を持ってブラブラさせて力を抜くようにした。また、コンガの連打や演奏では、コンガの音が小さく腕全体の力が弱いようであった。】

以上、身体を動かして力をコントロールするこ

とがまだ十分ではないようなので、子どもの身体の動きと言葉の表現も含めて“心身の柔軟性”をテーマとして、活動開始前の予想のように進めていくこととした。そして、“心身の柔軟性”のテーマについては、幼稚園の教師にも伝えて話し合った。

幼児期は身体が著しく発育し運動機能が急速に発達する時期である。2012（平成24）年に文部科学省から「幼児期運動指針」²¹⁾が公表された。策定の背景には、現代の生活全体が便利になったことで体を動かす機会が減少したことや幼児の体力・運動能力が低下したことが挙げられる。「幼児期運動指針」では、幼児期は基本的な動きを身につける時期であるとして、幼児期に体を動かす遊びを通して多様な動きを十分経験しておくことが大切であると示している。ガラヒュー（1999）は、幼児期に基本的な動きが獲得できない場合、児童期・青年期・成人期のスポーツスキルの習得が困難になり、欲求不満や失敗を繰り返すことになると述べている。²²⁾幼児期の動きの習得が児童期以降の教育に大きく影響することは、筆者の小学校教諭時代にも実感したことである。杉原・河邊（2014）は、大人が行う運動パターンは6、7歳頃までにすべて習得されると述べている。²³⁾従って、幼児期に“心身の柔軟性”を養う体験を重視しなければならない。

Ⅲ－２ 活動の展開例

本節では、「音楽グループ」が“心身の柔軟性”をテーマとして、子どもの表現を多面的に捉えて展開した活動を紹介する。活動の内容を（１）・（２）…で示し、具体的な展開を①・②…で示す。

Ⅲ－２－（１） ボールと歌「まあるいボール」

「音楽グループ」では、1年を通して様々なボールの活動を行っている。ボールを投げる、捕る、蹴るなどは大筋の操作運動である。対象（ボール）に力を加えたり力を受けたりする運動であり、体幹の大きな筋肉の動きが含まれると言われている。²²⁾「幼児期運動指針」では、運動発達の特性と経験の目安として、4歳から5歳ごろは基本的な動きが定着し、用具（ボールや縄など）を操作する動きを経験する時期だと示してい

る。²¹⁾幼児期の経験が十分でなく操作する動きが未熟であると、就学後の学習や活動はもちろんのこと、安全面（怪我や事故など）にも大きく影響してくる。「音楽グループ」では、個々の子どもが集中してボールに取り組む様子が見られるので、十分にボールと遊ぶ時間と空間を設けている。

歌「まあいボール」は、早川史郎作詞・作曲の歌であり、イメージを豊かにする活動としてよく用いている。1 題目「くるくるくるくるぼん／くるくるくるくるぼん／まわってまわって／めがまわる／まあいボール／くるくるくるくるぼん」2 題目「ころころころぼん／ころころころぼん／くぐれくぐれ／トンネルだ／まあいボール／ころころころぼん」3 題目「ひゆるひゆるひゆるひゆるぼん／ひゆるひゆるひゆるひゆるぼん／とばせとばせ／そらたかく／まあいぼーる／ひゆるひゆるひゆるひゆるぼん」

メロディーと「くるくる」「ころころ」「ひゆるひゆる」の言葉のフレーズが、回る、転がる、とぶボールの動きをイメージさせる曲である。

Ⅲ－2－(1)－① 1対1のキャッチボール

例年、「音楽グループ」の開始時には、コミュニケーションをねらいとする活動として教師と子どもの1対1のキャッチボールを行っている。

【手のひらを上に向けたまま「もらって（受ける）ポン（返す）」のタイミングでキャッチボールしていく。教師がボールの運び役になって、必ず子ども1人1人の目を見てキャッチボールしながら移動していく。最初はぎこちなかった子どもたちであったが、ボールの活動を繰り返していくうちに少しずつボールの操作が上達していく。ワンバウンドや転がすキャッチボールも行い、リズムカルにキャッチボールできるようになってきた。また、部屋の端から端まで離れて手首や肘をコントロールして投げ合う子どもたちもいる。】

Ⅲ－2－(1)－② 言葉のイメージと動き

ボールの動きを見て、言葉や身体で表現することをねらいとした活動も行った。

【ボールを持った教師を囲むように床に座る。教師はクルクルと片手でボールを回転させて、ポンと両手で止めてから子どもたちを見まわす。子どもたちは「くるくるボール」「くるくるぱっち」「くるくるぼん」とボールの

ありさまを言葉で表現する。その後、教師がボールを操作しながら歌うと、子どもたちはボールになって動きはじめた。「くるくる」と言いながら回る子、くるくる回って「♪ぼん」とお尻を叩く子、手をくるくる回している子もいる。思いきり回って「目がまわる～」と床に転がる子もいた。2 題目に「♪くぐれくぐれトンネルだ」の歌詞が出てくると、すぐに自分のイメージを表現し始めた。子どもたちは両手両足を床につけたり、ブリッジしてトンネルになる。教師がその表現を見て「みんなで1つのトンネルつくろう」と提案すると、子どもたちは互いにくっつき合ってトンネルになる。教師がボールをくぐらせ「トンネル成功」と叫ぶと、「よっしゃー」「やった！できた」と大満足の子もたちだった。3 題目では、「ひゆるひゆる」と両手を挙げて「凧みたい」と走りながら「ポン」でジャンプしている。他には、1人でボールをついたり、上に投げて受けたりの動きを黙々と繰り返す姿も見られる。】

最初は、ボールのイメージがなくうずくまっていた子どもたちが、動くボールを見てイメージを豊かにし、動きと言葉で表現することができた事例である。ありさま言葉については、幼稚園にことば遊びへの展開を提案した。

Ⅲ－2－(2) トランポリン

「音楽グループ」では、2台のトランポリンを活用している。トランポリンは、子どもの心身を解放し、自然と身体のコントロールができる用具である。トランポリンは、トランポリン上の限られた空間で多くの運動量と敏捷性が得られ、²⁴⁾ バランス・タイミング・リズム感覚が促進される効果がある。²⁵⁾ 最初の頃は、恐る恐る両手をついてトランポリンに乗る子や体が弾まずトランポリンから足が離れない子もいた。“心身の柔軟性”を活動のテーマにしてからは、幼稚園の室内遊びでもトランポリンが取り入れられ、子どもがトランポリンを跳ぶ機会が増えた。幼稚園と「音楽グループ」でのトランポリンの様子を比較すると、「音楽グループ」の方がどの子も長い時間跳んでいる。「音楽グループ」では、音楽が聴こえる環境の中でトランポリンを跳んでいるので、音楽によって躍動感を感じて跳ぶことができるのであろう。

Ⅲ-2-(2)-① トランポリンを跳ぶ

子どもたちがトランポリンを巧みに跳ぶようになった様子を、段階的に並べてみると下記のようなになる。

(跳び方)

- ・しゃがんだまま跳ぶ
- ・教師が手を持った跳べる
- ・膝が曲がり腰を落とす
- ・足首が硬く腕に力が入っている
- ・高く跳べるが体を前屈させている
- ・足首が柔軟で高く跳ぶが姿勢が不安定
- ・足首が柔軟で腕を振っている
- ・膝を屈曲させ両腕を振って高く跳ぶ
- ・高く跳ぶ時に踵をお尻につける
- ・足首が柔軟でつま先を下に向ける
- ・つま先で跳び高く跳ぶ時に手を挙げる
- ・回転しながら跳ぶ
- ・高く跳ぶ時に両足を広げる
- ・片足で回転しながら跳ぶ
- ・両足で跳んで途中から膝で跳ぶ
- ・歌いながら跳ぶ
- ・2人で手を繋いで跳ぶ
- ・複数で手を繋いで跳ぶ(2人から7人)
- ・2台のトランポリンを交差して入れ替わる

Ⅲ-2-(2)-② 交替のタイミング

トランポリンは1人ずつ跳ぶことが多いので、子どもたちは順番に待って交替して跳ぶ。最初の頃は、教師が交替の合図をしていたが、やがて子ども同士で声を掛けて交替できるようになる。3学期になるといろいろなスタイルの交替が見られるようになってきた。

(交替の仕方)

- ・ジャンプして跳び下りる
- ・両腕をバネにして高く跳び下りる
- ・前に跳んでいた子と入れ替わって跳び乗る
- ・曲のフレーズで交替する
- ・阿吽の呼吸で交替する

Ⅲ-2-(3) マザーグースの唄

「音楽グループ」では、よくマザーグースの唄を歌う。子どもたちが好きな唄は数多くあるが、その年によって歌う唄は違っている。2014年度

は、「ハンプティードンプティー」「このこぶたさんかいものに」「男の子ってなんでできてる」「女の子にあったかい」「まるまるふとった息子のジョン」「マフェットのおじょうさん」などを歌ってきた。

「マザーグースは体ぐるみで遊べる、口にすると楽しくて耳で聞いても楽しい唄であり、言葉と絵と音楽で織りなす唄である。人間のリアリティをもち不思議でナンセンスな唄は、マザーグースがもつ独特の魅力を感じさせ、自由奔放な空想の世界を引き出してくれる。表情豊かで多様性を持った音楽は感性に心地よく響き、解放と共感をもたらす。」²⁶⁾

マザーグースの唄では、子どもたちが自由にイメージできるように多様性を考慮して、絵本・視聴覚・パペット・人形などを用いている。たくさんの画家によって描かれたマザーグースの絵本も数多くあり、子どもたちは様々な表現で描かれている絵をじっと見つめ、不思議でおもしろい唄の世界を楽しんでいる。また、マザーグースのCDを聴きながら、様々な大きさの紙を床に広げてクレヨンのマーキングを楽しむこともある。マーキングでは、感じた音楽を自由に表出する解放感から、描いている子どもの動きもクレヨンの線もダイナミックになる。紙の上を歩きながら描く子もいるが、正座し正面の紙面にこぢんまりとマーキングしている子もいる。

Ⅲ-2-(4) 歌「5匹のこぶたとチャールストン」

「5匹のこぶたとチャールストン」は、夏期保育で幼稚園と音楽グループの合同プログラムを企画した時に歌った歌である。その後、2学期に幼稚園も連続した活動として展開していった。

Ⅲ-2-(4)-① ペープサート

子どもが愛着を持っている“こぶた”がチャールストンを踊ったらおもしろいのでは…という教師の発想から、手足がブラブラ動くペープサートを作成した。ペープサートの効果は、“こぶた”の名前を印象付けることと動く手足が“チャールストン”のステップを連想させることである。子どもたちはお気に入りのペープサートを操作しな

がら歌ったり、大好きなマザーグースの「このこぶたさんかいものに」の指遊びと関連させて楽しんでいたりしていた。

Ⅲ-2-(4)-② 映像の視聴

表現の多様性を感じることをねらいとして、「5匹のこぶたとチャールストン」を演奏している映像を視聴した。演奏は、ピアノと合唱（ステップ入り）、ドラムと合唱、ウッドブロックと合唱、オカリナとギター演奏、バンド演奏と踊り、歌と着ぐるみの踊り、コミックバンドの演奏の7種類である。演奏している曲の調子・楽器・人数・装いなど、多様な表現の「5匹のこぶたとチャールストン」の視聴に子どもたちはとても関心を示した。

【保育室の壁一面に映像が映し出されると、子どもたちから歓声が上がった。次々映し出される映像に、大声で笑ったり、思わず耳をふさいだり、踊り出したり、「ヘイヘイ」と合いの手を入れたり、オカリナの音に思わず「かわいい」とつぶやいたり、「さっきのもう1回みたいな」とリクエストしたり様々な反応があった。】

幼稚園の教師も一緒に視聴して楽しんだが、子どもの反応の大きさや集中が持続したことに驚いていた。その後、複数の楽器を用いての即興演奏、歌いながら“チャールストン”のステップを踏む、歌のイメージから5匹のこぶたを描くなどの活動に発展した。

Ⅲ-2-(4)-③ ダンスの創作

「音楽グループ」で楽しんでいたので、幼稚園ではみんなでダンスを創作して踊っていた。

Ⅲ-2-(5) 楽器

Ⅲ-2-(5)-① 楽器の自由演奏

「音楽グループ」では、楽器を乱暴に扱わない事だけをルールとして、自由に演奏して楽しむことをねらいとする活動がある。この活動では、子どもが自由に叩いたり、打ったり、こすったり、振ったりしながら、楽器の音色や奏法を発見し、楽器に対する親しみを持って積極的に演奏する姿勢を育むことができる。

子どもが楽器を自由に演奏する楽しさやおもしろさが体験できるように、楽器の配置や隊形など

を工夫している。互いの表情を見ながら楽しめる隊形は、楽器を置いた椅子を円形に配置する場合である。この隊形では、曲が変わるたびに隣に移動するおもしろさもある。また、楽器が置いてある机の間を自由に移動して、演奏したい楽器を選べる隊形もある。

【教師が様々な曲をランダムに演奏すると、走って楽器を取りに行く子、耳もとで振って音を聴く子、上下に大きく振って歩く子、こすり合わせたり打ち合わせたり振ったりする子、片手・両手・左右交互で打つ子、いろいろなリズムを打つ子、曲のリズムに合わせて左右跳びしながら鳴らす子など様々である。「次は、チャールストンにして」「もう1回こぶたさん」など子どもが弾いて欲しい曲をリクエストすることもある。伴奏している教師の横でピアノを弾く子もいる。楽器の自由演奏では、自分が使いたい楽器を使えない場合もある。「次貸してね」と交渉する子や使いたい楽器を持っている子の後ろをついて行く子、ねらっていた楽器が机に置かれた瞬間走って取りに行く子もいる。時々、楽器よりも友達との関係を気にして集中できない子もいて、子どもの人間関係が見えてくる。】

楽器の自由演奏では、楽器を決めて演奏することもある。一列に並べた6個のコンガとボンゴを演奏する時は、演奏の前に一齐に高速連打する活動を必ず取り入れている。子どもたちは両手を精一杯の速さで動かして連打し、表出する解放感でいきいきとした表情になる。そして、教師の指揮で止まる瞬間の静けさも快感となっている。

Ⅲ-2-(5)-② 合奏「時計屋の店」

2014年度幼稚園のクリスマス会では、年長組が「時計屋の店」（オルト作曲）の合奏に取り組んだ。合奏の導入では「時計屋の店」のイメージが豊かになるよう、室内遊びで「時計屋の店」のCDを聴きながら、時計づくりの製作コーナーを設けていた。また、様々な種類の時計の映像も視聴していた。

合奏は、幼稚園の教師と「音楽グループ」の教師が連携して子どもと共に創り上げていった。希望者だけが参加している「音楽グループ」の時間に演奏する時は、年長組の人数が足りないので楽器の掛持ちが必要となる。互いに教え合ってどんどん積極的に楽しむようになり、クリスマス会が

近くなる頃には、どの子どもも音楽の流れにのって、どの楽器を担当しても演奏できるようになっていく。感覚が育つ幼児期の子どもたちにとって望ましい活動である。

Ⅲ－２－（６） 音楽的な環境での自由遊び

「音楽グループ」では、音楽的な環境での自由遊びを毎回取り入れるようにしている。この時間は、ビデオ記録で確認すると子どもの瞳が最も輝いている時である。この輝きは子どもの内から表れているものであり、遊びを自由に選択し自分なりの挑戦ができることが原動力になっているのであろう。自由遊びの環境構成には、“心身の柔軟性”に対して子どもたちが自発的に取り組めるように、ボールとトランポリンは必ず置いている。他には、その日の活動で取り入れた楽器や用具を置くなど、教師が「何で遊びたいですか」「これでいいかな」と子どもたちに投げかけて共に創っている。自由遊びを始める時間も、その日の子どもの様子で教師が提案したり、子どもが「トランポリンしよう」「遊びたい」と言ったりして決めている。

自由遊びの間は、子どもの様子を見て教師がピアノを弾いていることが多い。子どもと歌った歌やマザーグースの唄、ピアノ曲などバックグラウンドミュージックとして流れている。子どもによっては、弾いてほしい曲をリクエストしたり、教師の横で一緒にピアノを弾く真似をして音を出したりしていることもある。子どもが口ずさめる歌やメロディーが聴こえてくると、活気ある空間となる。歌いながらジェンカやチャールストンのステップでトランポリンを跳ぶ子、「くるくるボン」のリズムに合わせてキャッチボールする子やコンガやバンブードラムでリズムを刻む子など、自由遊びに音楽が伴うと子どもの動きがリズムカルになる。

自由遊びでは、自由な雰囲気の中でやりたいことをその子のペースで過ごせることが、自分らしさを発揮することに繋がっている。また、教師にとっては、個々の子どもの傾向や発達を知る機会にもなっている。

Ⅲ－２－（７） 動く

“心身の柔軟性”をテーマとしているので、体を動かすことは様々な機会を捉えて活動と関連させながら取り入れている。・マザーグースの唄を歌ってカエルのように跳んだ後、足首を回してみる。・トライアングルの奏法を紹介しながら、トライアングルの音が鳴ったら耳を澄ますと同時につま立てをしてみる。・「白クマのジェンカ」の楽器演奏やステップの後に、左右交互の片足バランスをしてみる。・バンブードラムのリズム打ちをした後に、各自で考えたバンブーの跳び方を発表して跳んでみるなど。「音楽グループ」では、個々の子どもがリラックスして、自分のペースで体を動かすことを楽しんだり工夫したりできるよう配慮している。失敗してもうまくできなくても、気にすることなく自分なりに繰り返し試すことができる雰囲気大切にしている。

Ⅳ 終わりに（宮本）

本稿では、「音楽グループ」の活動を通して、教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動のあり方を考察してきた。筆者が幼稚園教諭時代には、「音楽グループ」の活動や歌などを保育に取り入れることはあったが、教育時間終了後の教育活動を「音楽グループ」の担当者に任せ、連携という意識はなかったように思う。Ⅲ－２に記載した“心身の柔軟性”をテーマとした活動の様子からは、子どもたちが心身共に柔軟に変化していく姿が見えてきた。この子どもたちの変化は、教育時間終了後の「音楽グループ」と幼稚園が連携して、子どもの生活や活動の連続性に配慮した結果であったと考えられる。「音楽グループ」は、希望者が参加している活動であるが、「音楽グループ」での体験が幼稚園で発揮され、幼稚園の活動に広がって行くこともある。教育時間終了後の教育活動は、参加している子どもたちだけに留まらず、幼稚園生活全体を豊かにしていくこともできる。

近年の幼稚園の教育活動としては、預かり保育や各種教室（体操・水泳・サッカー・バレエ・ピアノ・英会話・絵画・陶芸・習字など）が行われているようである。子どもを取り巻く社会の変化によって子どもたちの家庭環境も多様化してお

り、教育時間終了後の教育活動のニーズは今後ますます求められていくであろう。教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動については、幼稚園における教育活動として、幼稚園教育の基本を踏まえて実施されなければならない。子どもの生活の連続性や多様性を考慮して、様々な視点から子ども理解を深めていくために、幼稚園と教育活動に携わる教師間の連携を密にしていくことが重要である。

〈註〉

1. 「幼稚園教育の基本」(『幼稚園教育要領解説・付録』第1章総則第1)平成20年 文部科学省 256頁
2. 「学校教育法」(『幼稚園教育要領解説・付録』第三章幼稚園第二十二條)平成20年 文部科学省 252頁
3. 「改訂の基本方針」(『幼稚園教育要領解説・付録』序章第1節改訂の基本的な考え方2)平成20年 文部科学省 3頁
4. 南信子「豊かな人間を育てるために」(『音楽グループだより』第3号)1973年 北陸学院短期大学附属幼児・児童教育研究所 1頁
5. 「教育課程の基準の改訂の経過」(『幼稚園教育要領解説』)平成20年 文部科学省 242～243頁
6. 水原克敏『幼稚園教育課程の基準とモデルカリキュラムに関する歴史的考察』(「子ども学」第2号)2014年 萌文書林 24～40頁
7. 吉田若葉「幼児の音楽グループとともに」(『花の蕾のひらくとき』)2000年「北陸学院 幼稚園の物語」編集委員会 55～60頁
8. ジェームス・L・マーセル/美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽之友社 1972年 10～11頁
9. 吉田若葉『幼児期の音楽教育のあり方に関する一考察』(「紀要」第15号)1983年 北陸学院短期大学149～173頁
10. ジェームス・L・マーセル/美田節子訳『音楽的成長のための教育』音楽之友社 1971年 1頁 10頁
11. 「幼児期の発達」(『幼稚園教育要領解説』序章第2節1(2))平成20年 文部科学省 11頁
12. 「幼児期の発達」(『幼稚園教育要領解説』序章第2節1(2))平成20年 文部科学省 13頁
13. 吉田若葉『保育における楽器指導 - 創造的な人間形成と音楽教育』(「紀要」第20号)1988年 北陸学院短期大学 177～196頁
14. 吉田若葉『子どもの音楽表現にみられる解放と共感』(「保育学研究第36巻第1号」1998年 日本保育学会 67～74頁
15. 吉田若葉『幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告 - 5歳児での実践(クリスマス)』(「紀要」第39号)2007年 北陸学院短期大学 105～121頁
16. 吉田若葉「輝く瞳に元気を与えられ」(『馬場幼稚園90周年記念誌』)2000年 34～36頁
17. 木村信之『創造性と音楽教育』1980年 音楽之友社 219～239頁
18. 小林美実「幼児の音楽表現と保育(総説)」(『保育学研究第36巻第1号』)1998年 日本保育学会 8～11頁
19. 「表現」(『幼稚園教育要領解説・付録』第2章ねらい及び内容)平成20年 文部科学省 261頁
20. 「教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」(『幼稚園教育要領解説・付録』第3章第2)平成20年 文部科学省 267頁
21. 「幼児期の運動の在り方」(『幼児期運動指針ガイドブック』)平成23年 文部科学省 50頁 51頁
22. デビット・L・ガラヒュー『幼少年期の体育:発達視点からのアプローチ』1999年 大修館書店 63頁 70頁
23. 杉原隆・河邊貴子『幼児期における運動発達と運動遊びの指導:遊びの中で子どもは育つ』2014年 ミネルヴァ書房 19頁
24. 日比野朔郎『トランポリン運動の体育学的側面からの考察』(「理学・生活科学」第27号)1976年 京都府立大学 55頁
25. 山本博男・東章弘・山本紳一郎・犀川豊・堂久仁子『小学校におけるノーバウンストランポリンのトレーニング効果』(教育工学研究19号)1993年 金沢大学 35頁 38頁
26. 吉田若葉『創造性豊かな保育者養成を目指す授業の工夫「子どもと表現I」におけるマザーグースの活用効果』(「紀要第38号」)2006年 北陸学院短期大学 153頁